

予自少日製新鼻碟十個  
 未廣一望中一陽悅壯家  
 少要之器交應謝於忠壯  
 書空魁早閣十名分居分  
 魁星之圖一揮發作圖之  
 能批名士之靈器實三紀念  
 之愛玩也

其外錦綉空窠得尊身據  
 聖皆妙品且之并感謝不  
 書也。感德兩快晴之頃若  
 得自身體之曰拜却萬謝  
 中上度時。靈雨之自在

七月一日 富岡鐵齋  
 蘇訪菴山樣



1. 富岡鐵齋書 諏訪蘇山宛 七月一日付書翰



# 鐵齋の書美 (六)

## — 諏訪蘇山宛書翰(2) —

野 中 浩 俊

### 繪具磔の授受

次に、前号で紹介した富岡鐵齋が諏訪蘇山に宛てた書翰(全三巻・計二十三通)の中、蘇山から贈られた繪具磔えのぐざらについて記された二通の書翰を紹介したい。

先ず、第一通目の七月一日付書翰(巻頭グラビア1.)は、

過日者御手製彩具磔十個

御齋し望外之満悦拙家

必要之器重々感謝致候愚拙

書室魁星閣卜名ツケ居ニ付即

魁星之圖一揮致候圖畫

雖拙名士ノ器器實ニ紀念

之愛玩也

其外錦欄窓釋尊孛

塑皆妙品是亦感謝不

盡他日霪雨快晴之頃若

得身體之日拜趨萬謝

申上度時ニ霖雨御自重

七月一日 富岡鐵齋

諏訪蘇山様

過日ハ御手製ノ彩具磔十個

御齋シ、望外ノ満悦。拙家

必要ノ器、重々感謝致シ候。愚拙

書室ヲ魁星閣卜名ツケ居ルニ付、

即チ魁星ノ図ヲ一揮致シ候。図画

ハ拙ト雖モ名士ノ器器、實ニ紀念

ノ愛玩也。

其ノ外、錦欄窓ノ釈尊孛

塑、皆妙品、是レ亦々感謝

尽ズ。他日、霪雨快晴ノ頃、若シ

身体ノ日ヲ得バ拜趨万謝

申シ上ケ度シ。時ニ霖雨御自重。

七月一日 富岡鐵齋

諏訪蘇山様

富岡百鍊

蘇山高士

七月一日

富岡百鍊

蘇山高士

七月一日

とあり、この書翰は数日前に蘇山から繪具磔を贈られたことに謝意を表すとともにその磔に鐵齋が自らの書庫「魁星閣」に因んで魁星の図を絵付けし、その由来を記した旨が述べられている。

この書翰は文字が大振りで、文体は鐵齋特有の和式漢文体とでもいべきもので書かれている。書体は楷書に近い行書でほとんど連綿を用いず訥々と単体で綴られ、堂々として鐵齋の面贇を思わせる風格を漂わせている。

二通目の七月十六日付書翰(巻頭グラビア2.)には、

昨日虎屋主人携

御精造之繪具磔來

拜掌致候猶亦午

後ニハ虎屋貴館へ

參趨之筈ニ付別

包拵置待居候屢俄ニ

急用差支延引致

し居候屢只今

御專使ニ預り御遠

來山の芋外珍

品御惠重々御禮申入候右

繪具磔之義前書ニ

盡シ置候爰再演ニ

昨日虎屋主人

御精造ノ繪具磔携エ來リ

拜掌致シ候。猶亦、午

後ニハ虎屋ガ貴館へ

參趨ノ筈ニ付、別

包拵エ置キ待チ居リ候処、俄ニ

急用差支エ延引致

し居リ候処、只今

御專使ニ預リ御遠

來山ノ芋外珍

品御惠ミ重々御礼申シ入レ候。右

繪具磔ノ義、前書ニ

尽シ置候。爰ニ再演ニ

不及餘ハ他日御禮

申上候早々

七月十六日 富岡鉄齋

諏訪蘇山様

及バズ、余ハ他日御礼  
申シ上ゲ候。早々  
七月十六日 富岡鉄齋  
諏訪蘇山様

富岡鉄齋

蘇山隠士

侍史

七月十六日

富岡鉄齋

蘇山隠士

侍史

七月十六日

と記され、焼き上った絵具磔が前日、虎屋主人黒川魁亭によって鐵齋に届けられた事を伝え、その折、返礼のため虎屋を蘇山宅に差し向ける予定であったが、急用が生じ延引していた旨が述べられている。

実は、蘇山が製作した鐵齋愛玩の絵具磔は、現在、清荒神清澄寺に二組收藏されている。そのうちの一組は「画磔」と箱書され、十枚重ねの磔に蓋が付けられており(図4)、今、一組は「絵磔」と箱書され、十一枚重ねの磔に蓋が付けられている(図12)。この二組の絵具磔については、故小高根太郎氏が既に画賛や箱書を解説されており、幸い今回鉄齋美術館からこれらの資料をご提示頂いたので、図版と資料によって二組の絵具磔の概要を述べてみたい。

「画磔」の蓋は、表に「魁星閣」と篆書で書かれ、蓋裏には

大正十季七月、蘇山翁造之見

惠。魁星閣主人鐵叟記。

と記されている。「画磔」は十枚の磔を重ねた側面に大きく魁星の図を

大正十年七月、蘇山翁之ヲ造リテ

惠マル。魁星閣主人鐵叟記ス。

描き、画賛として

魁星者北斗七星之(第一星也)。因魁字之形、先寫鬼(旁)。故其像、面貌凶惡。提斗者、乃曰魁字有斗旁。故其像一手提斗也。魁者首稱也。故天下士人、取文章魁首之意而塑像於文昌之前以祀之。

と、『歴代画像伝』卷之一に魁星の典故を求めて、長い賛文を書き入れている。

「画磔」の箱書は、箱蓋の表に

畫磔

と書き、裏面に

此瓷器者、帝室技藝員蘇山翁所造、此木器者菊齋所製。咸余之愛玩品。

大正十年七月。鐵齋外史自識、於魁星閣。

画磔

此ノ瓷器ハ帝室技藝員蘇山翁ノ造ル所、此ノ木器ハ菊齋ノ製スル所。咸余ノ愛玩品ナリ。

大正十年七月。鐵齋外史自カラ識ス、魁星閣ニ於テ。

と記している。更に箱の側面は四面に

磁器之可用于畫者甚多。磁器ノ画ニ用ウ可キ者甚ダ多シ。其ノ擇其至要者用之。大缸盛 至要ナル者ヲ扱ビテ之ヲ用ウ。大缸ハ河水、待其清以備煎膠洗 河水ヲ盛リ其ノ清ムヲ待チテ以テ膠ヲ絹之用。先用一缸盛一二煎、絹ヲ洗ウノ用ニ備ウ。先ズ一缸ヲ



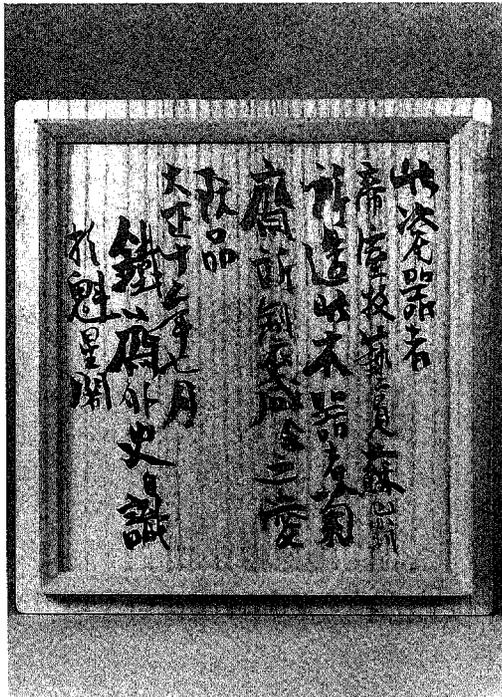
5. 同蓋裏



4. 画碟

擔水澄之。三日後、以清水過于第二缸内。所留泥脚棄(之)。另貯新水。越三日、第二缸清水將馨。取其所餘者棄之。又將第一缸清水(過之)、更換不已。三日爲度。若過五六日、太宿不可用。缸脚不出、蟬聯不斷、水亦易壞。有時不用大缸。則中缸盛水一桶、小缸盛水數升而已。新缸貯水一年、火氣方褪、(可免)水煖。若曾經釀酒造醬藏醃蓄蘆之缸、概不可用。恐有鹽酸(之)氣也。瓊瑤玫瑰鑄銀範金之貴、不必要。無取華飾也。黃沙・青瓦・宜興紫泥、皆能滲水、與敝漏同。大盃盛水、置案頭一宿即清。日日去脚、味更新鮮。罇絹時、必用大盃、盛膠礬水、以便溫者不易冷。約一盃可膠絹一丈。泥澱大盃盛已泥之

用イテ一二担ノ水ヲ盛りテ之ヲ澄マ  
 ス。三日ノ後、清水ヲ以テ第二缸内ニ  
 過ス。留ル所ノ泥脚ハ之ヲ棄テ、新水  
 另チ貯ウ。三日ヲ越テ第二缸ノ清水ヲ  
 二馨シカラントス。取リテ其ノ余ル所  
 ノ者ハ之ヲ棄ツ。又、將第二缸ノ清  
 水、之ヲ過シテ更ニ換エ已メズ。三日  
 ヲ度ト爲ス。若シ五六日ヲ過ギレバ太  
 ダ宿シテ用ウ可カラズ。缸ノ脚出ダサ  
 ズ、蟬聯斷エザレバ、水モマタ壞リ易  
 シ。時有リテ大缸ヲ用イズ。則チ中缸  
 ニハ水一桶ヲ盛り小缸ニハ水數升ヲ盛  
 ルノミ。新缸、水ヲ貯ウルコト一年、  
 火氣方ニ褪セ、水ノ煖キヲ免ル可シ。  
 曾テ酒ヲ釀シ醬ヲ造リ醃ヲ藏シ蘆ヲ蓄  
 ウルコトヲ經シ缸ノ若キハ、概シテ用  
 ウ可カラズ。塩酸ノ氣有ルヲ恐ルルナ  
 リ。瓊瑤・玫瑰・鑄銀・範金ノ貴キハ  
 、必ズシモ要ラズ。華飾ヲ取ムルコト  
 無キナリ。黃沙・青瓦・宜興ノ紫泥ハ  
 皆能ク水ヲ滲ムモ、敝レ漏ルコト同  
 ジ。大盃ニ水ヲ盛り案頭ニ置イテ一宿  
 スレバ即チ清シ。日々脚ヲ去レバ味更  
 ニ新鮮ナリ。絹ニ罇スル時ハ必ズ大盃  
 ヲ用イテ膠礬水ヲ盛り、以テ温メシ者



7. 同裏



6. 画碟 箱書表

藍。漂朱沙、大盃出標、中盃貯沙。染(筆)蘸水用(中)盃。色筆常洗用小盃。時時棄水、時時換水。且列盃宜多。以分朱綠不(致)混淆。泥金多者用大碟。少則七寸碟。乳粉亦如之。乳澱宜用中碟。旋乳(旋)化、以少爲貴。漂各色、少者用小碟足矣。調色專有畫碟。七十二色、用碟甚多。故不可不多。爲預備其臨時用色。或濃或淡、宜於格碟內調之。格碟者一碟之內、如窗有格、眼田有經界、區以別矣。葵花・蕉葉・海棠・桅子、形式不同、深淺互異。每有一色可用一碟。濃淡各別而仍聚于一處。良甚便也。今人筵席所用醬菜、格碟中一格盛醬、旁五六內格(盛)各種小菜。即畫碟也。

ノ冷メ易カラザルニ便ス。約一盃、絹一丈ニ膠ス可シ。泥澱ハ大盃ニ已ニ泥セル藍ヲ盛ル。朱沙ヲ漂スニハ大盃ニ標ヲ出ダシ、中盃ニ沙ヲ貯ウ。染筆水ニ蘸スニハ中盃ヲ用ウ。色筆常ニ洗ウニハ小盃ヲ用イ、時々水ヲ棄テ、時々水ヲ換ユ。且ツ盃ヲ列ブルコト宜シク多カルベシ。以テ朱綠ヲ分チ混淆ヲ致サズ。泥金、多キ者ハ大碟ヲ用イ、少ケレバ則チ七寸ノ碟。乳粉モマタカクノ如シ。乳澱ハ宜シク中碟ヲ用ウベシ。乳ヲ旋ラシ化ヲ旋ラスニハ少キヲ以テ貴シト爲ス。各色ヲ漂スニハ、少キ者ハ小碟ヲ用ウレバ足ル。色ヲ調ウルニハ專ラ画碟有リ。七十二色、碟ヲ用ウルコト甚ダ多シ。故ニ多カラザル可カラズ。預メ其ノ臨時ノ用色ニ備エシク格碟ノ内ニ於テ之ヲ調ウベシ。格碟トハ一碟ノ内、窓ノ如ク格有ルモノニシテ、眼田經界有リ、区シテ以テ別ル。葵花・蕉葉・海棠・桅子、形式同ジカラズ、深淺互イニ異ル。一色有ル毎ニ一碟ヲ用ウ可シ。濃淡各々別レテ仍一處ニ聚マル。良ニ甚ダ便ナリ。今

中飽盛水一桶入缸盛水數升也  
 意好小工身大氣方通水銀者曾  
 經釀酒造醬醋等類之類之氣聚  
 不可用恐有顯酸在末項諸玻璃  
 鏡銀鏡金之類不悉用無差錯也  
 貴沙者宜用與水質皆能滲水與  
 鹹漏白大鉛盛水置置頭一若無作  
 日名脚味更新鮮裝瓶後用木

9. 同2

磁器之可用者甚多其具至  
 要者用之紅藍兩水皆其所以  
 備並磨法胡之類之類一紅藍二  
 摻水淡土之類以清水過了日  
 缸內所置磁器亦不另購者此類  
 之類之類清水者其所以備者至  
 之之將第一節清水更換不已之類  
 若過五六日者不可用缸脚不出脚  
 聯不飽水亦見壞有內不隔大則

8. 画碟 箱書側面1

衣不可不多為預備其器時日色重深  
 淺淡宜於格碟用調之格碟者一碟之  
 內如皆同者格碟口有無界分區以別美  
 一茶花葉葉海菜樣式不同  
 淡者宜宜有之色可用一碟淡淡  
 各別者仍聚手一處宜宜長便也今  
 人盤者所用者一茶花碟中一格碟  
 指者五六月間不種小茶花可也  
 右指無餘畫畫畫畫畫畫畫畫畫畫

11. 同4

磁器之可用者甚多其具至  
 可勝其之法極大極盛之類之類  
 朱沙大盤出碟中盤時沙沙沙沙  
 紅藍二色者合法用之磁器者水  
 所時換水且勿置宜多以分朱絲不  
 限清淨宜多者用大碟少則七日  
 破氣新亦宜之氣潔宜用中碟磁器  
 化以少者宜宜各色者用小碟是矣  
 細色者有七碟七之二色月破甚多

10. 同3

右摘録繪事瑣言磁器部。

鐵齋外史。

人筵席ニ用イル所ノ醬菜、格碟中ノ一格ニ醬ヲ盛り、旁ラノ五六ノ格ノ内ニ各種ノ小菜ヲ盛ル。即チ画碟ナリ。右ハ繪事瑣言磁器部ヲ摘録ス。鐵齋外史。

と、画の制作に用いる磁器について、その種類やそれぞれの特徴、使用方法等、『繪事瑣言』から引用し、長文の箱書を記している。

一方、「繪碟」は、碟の蓋の表面に魁星の図を描き、蓋裏には

大正十年八月、蘇山コレヲ造リ以テ惠マル。魁星閣主人コレヲ画キ、鐵叟又記。年八十又六。

大正十年八月、蘇山コレヲ造リ以テ家藏ト為ス。鐵叟又記ス。年八十又六。

と、「繪碟」作製の由来が記され、十一枚の碟を重ねた側面に鐵齋の書庫「魁星閣」の図が描かれている。

また、この「繪碟」の箱書は、箱蓋の表面に

繪碟、

繪碟

と記され、箱蓋の裏面には

大佛諏訪蘇山翁、爲余造此繪碟貳十個見惠。鐵齋外史。繪碟式十個ヲ造リテ惠マル。鐵齋外史。蘇山造。余自鑄。

鑄印。蘇山造ル。余自カラ鑄ル。

と記されている。更に箱の側面は、三面に

芥子園書傳曰。煉碟及顏色碟子、先以米泔水溫温。煉ルニハ、先ヅ米ノ泔水ヲ以テ温々ニ煮、出再以生薑汁及醬塗。煮、出シテ再ビ生薑汁及ビ醬ヲ以テ底

底下、入火煨頓、永保不裂。

下ニ塗り、火ニ入レテ煨キ頓ウ。永ク保チテ裂ケズト。

繪事鎖言卷六、有磁器部。詳載可于畫之磁器者。宜一讀也。

繪事鎖言卷六ニ磁器部有リ。詳カニ、画ニ用ウ可キノ磁器ヲ載セタレバ、宜シク一読スベキナリ。

大正十年九月、大佛諏訪蘇山翁再製此碟子見贈。余感謝之意、今不可述云。

大正十年九月、大佛ノ諏訪蘇山翁、再此ノ碟子ヲ製シテ贈ラル。余ガ感謝ノ意、今述ブ可カラズト云ウ。

識于魁星閣。八十有六鐵齋外史。

魁星閣ニテ識ス。八十有六鐵齋外史。

と、『芥子園画伝』から繪具碟の使用法についての一節を引用し、更に『繪事瑣言』の画の磁器についての記載にまで言及している。その上、二年後の大正十二年には残る一面に

又讀方以智物理小識曰。

又、方以智ノ物理小識ヲ讀ムニ、曰ク、

薑汁塗杯乾之、又塗極厚而止、火之可使盡赤而磁不爆炸。

薑汁、坏ニ塗リテ之ヲ乾カシ、又塗ルコト極メテ厚クシテ止ム、之ヲ火キテ尽ク赤カラシムレバ、磁爆炸セズト。

八十又八叟 鐵齋書。

八十又八叟 鐵齋書。

と、『物理小識』の一節を引用し、箱書を追記するほどの念の入れようである。

ところで、蘇山に宛てた前掲の二通の書翰とこの二組の繪具碟との関連であるが、書翰はいずれも使者によって手渡された為、発信日は月日のみで年紀が記されていない。しかし、二組の繪具碟とそれぞれの箱書には紀年があり、製作の年月や箱書の日付を確定することが出来る。そこで二通の書翰が書かれた年月日を特定する為、二十三通の書翰の内容



13. 同蓋裏



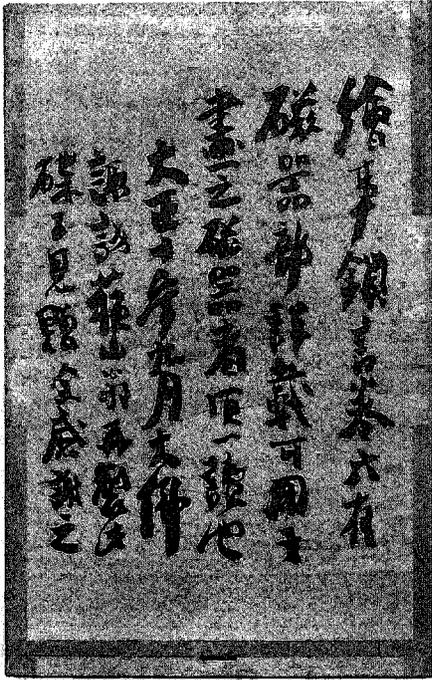
12. 繪碟



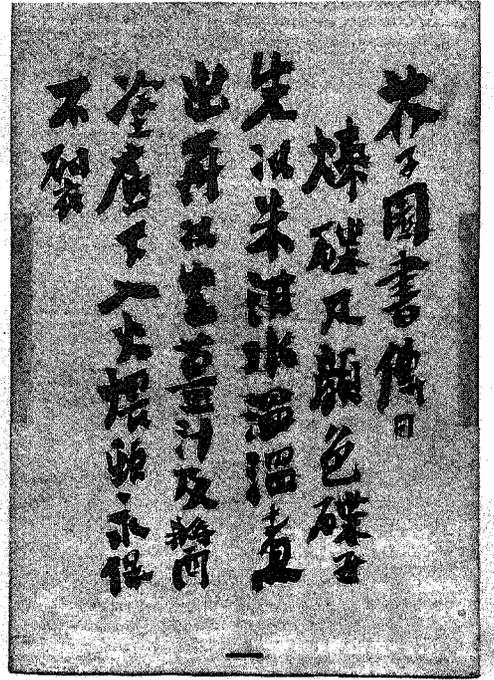
15. 同裏



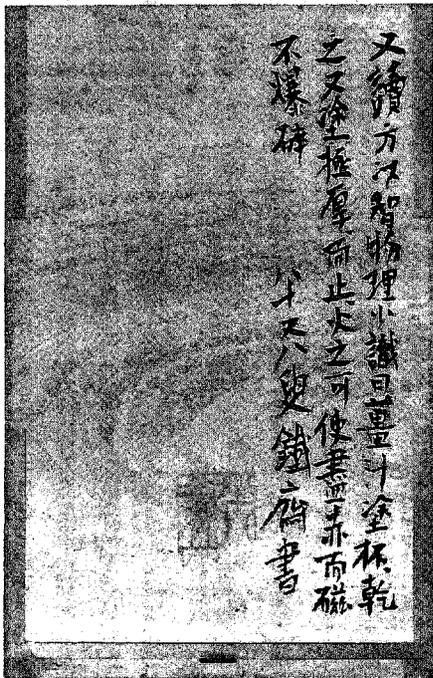
14. 繪碟 箱書表



17. 同2



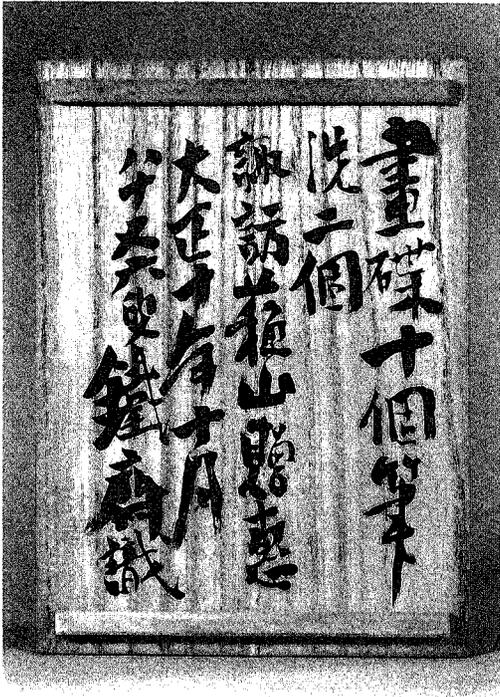
16. 繪磁 箱書側面 1



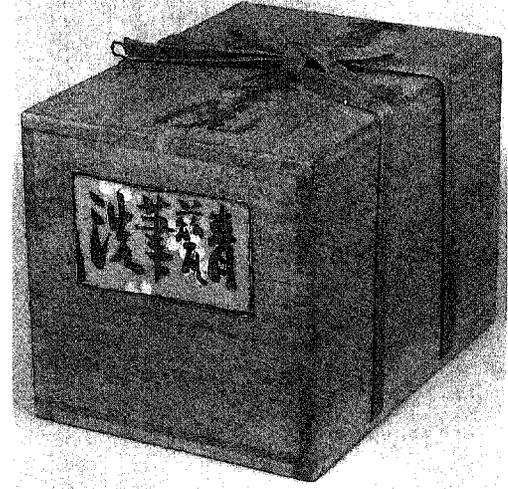
19. 同4



18. 同3



21. 同箱書裏



20. 青瓷筆洗

と二人の日常の交友の情況、鐵齋の制作のテンボ等を再調査した結果、この二通の書翰はほぼ同時期、つまり大正十年七月に書かれたものであり、いずれも「画碟」の授受に関する書翰である事が判明した。この他、「画碟」に関する資料としては、清荒神清澄寺所蔵の「青瓷筆洗」(図20)の箱書きを上げることが出来る。

表 青瓷筆洗。

青瓷筆洗。

裏 畫碟十個筆洗二個。

画碟十個、筆洗二個、

諏訪蘇山贈惠。

諏訪蘇山ヨリ贈惠サル。

大正十年十月。

大正十年十月。

八十又六叟 鐵齋識。

八十又六叟 鐵齋識ス。

ここには蘇山から画碟と共に青磁の筆洗が贈られた事が記されている。それでは「絵碟」については何か手懸りとなる記録はないか、この二十三通の書翰をはじめ、鐵齋・蘇山二人の関連資料の中に現在のところ「絵碟」に関する記述は見出す事が出来ない。

### その他の関連資料

次に、これらの他、清荒神清澄寺所蔵品の中から、二人の關係を示す資料を列挙したい。

〔高遊外詩画染付菓子鉢〕

(図22)

自笑東西漂泊客、

自ラ笑ウ東西漂泊ノ客、

是吾四海即爲家。

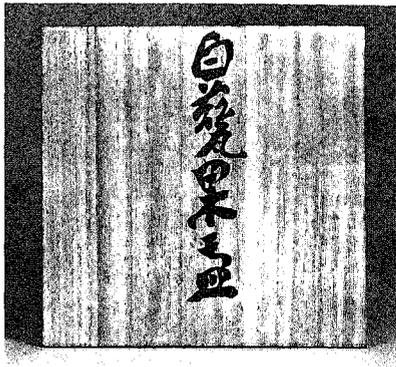
是レ吾ガ四海、即チ家ト爲ス。

舊時交友如相問。

旧時ノ交友相問ノ如シ。

第二橋邊舍水涯。

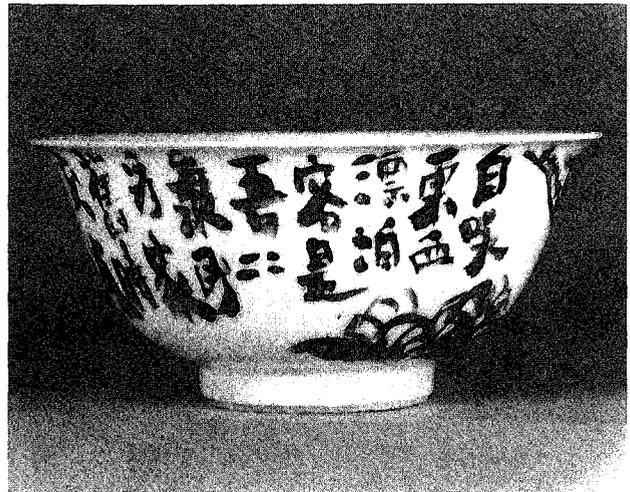
第二ノ橋邊水涯ニ舍ス。



23. 同箱書表



24. 同裏



22. 高遊外詩画染付菓子鉢

高遊外詩 鐵齋畫書

高遊外ノ詩 鐵齋画書。

これは白磁の菓子鉢に鐵齋らしい豊かな筆致で山水を描き、併せて高遊外（売茶翁）の詩を賛文として記している。この菓子鉢は箱書に

表 白瓷果盃。

白瓷果盃。

裏 大正十年小花月。

大正十年小花月。

畫之并題賣茶翁詩。鐵

之ヲ画キ并セテ売茶翁ノ詩ヲ題

齋外史。時年八十八又六。

ス。鐵齋外史。時二年八十八又六。

又曰、蘓山人所署印章

又曰ク、蘇山人署スル所ノ印章ハ

余刻以贈山人也。

余ガ刻シ以テ山人ニ贈ルナリ。

と記している。

〔帝者師太公望釣魚図〕

（図25）

潜影嶮嶮水。呼雲躍大空。

影ヲ潜ム嶮嶮ノ水。雲ヲ呼ンテ大

眞龍如呂尚。呂尚似眞龍。

空ニ躍ル。眞龍ハ呂尚ノ如ク、呂

大正辛酉八月。八十八又六叟

尚ハ眞龍ニ似タリ。

鐵齋詩畫。

大正辛酉八月。八十八又六叟、鐵齋

詩画。

この作は、周の文王に見出された呂尚（太公望）の故事を描いて詩を賦したものであるが、その箱書に

表 帝者師太公望釣魚圖。

帝者師太公望釣魚圖。

裏 是余向所贈陶隱蘓山翁。

是レ余ガ向ニ陶隱蘇山翁ニ贈リシ

今日再觀并題。時大正十

所、今日再觀シ并セテ題ス。時二

一季二月。八十有七叟

大正十一年四月。八十有七叟、鐵

齋又識。

齋又識ス。

と書かれ、蘇山旧藏の作に蘇山歿後、箱書したものである。

階前山峯小呼、中多怪大空  
 皇眞龍入日尚早尚如平之龍  
 大正十一年三月六日  
 蘇山翁畫



25 帝者師太公望釣魚圖

〔諏訪蘇山宛書翰 掛幅〕

〔図26〕

此煉礫支那古製也。我邦摸造  
 如在。高士以爲如何。若欲試  
 伎倆与賜新窰。然強不欲煩高  
 手。

蘓山高士。 鐵齋。

此ノ煉礫ハ支那ノ古製也。我邦ノ  
 摸造ハ在ルガ如シ。高士以テ如何  
 ト為サン。若シ伎倆ヲ試サント欲  
 セバ、タメニ新窰ヲ賜ワラン。然  
 ルニ強メテ高手ヲ煩ワスルヲ欲セ  
 ス。

蘇山高士。 鐵齋。

これは支那の古い煉礫を示し、蘇山にその写し作製の意思を質した書翰で、年月の記載もなく、文章もきわめて簡略なものではあるが、二人の交情の濃密な様子が窺われる貴重な資料といえよう。

〔羅漢圖 箱書〕

〔図27〕

表 楸 羅漢圖  
 裏 大正十一年三月。爲諏訪  
 蘇山翁薦事畫之  
 八十有七老人。鐵齋并書。  
 八十有七老人、鐵齋并七書ス。

これは翌年の蘇山の一周忌法要に配る楸の下図として制作された「羅漢圖」の箱書である。

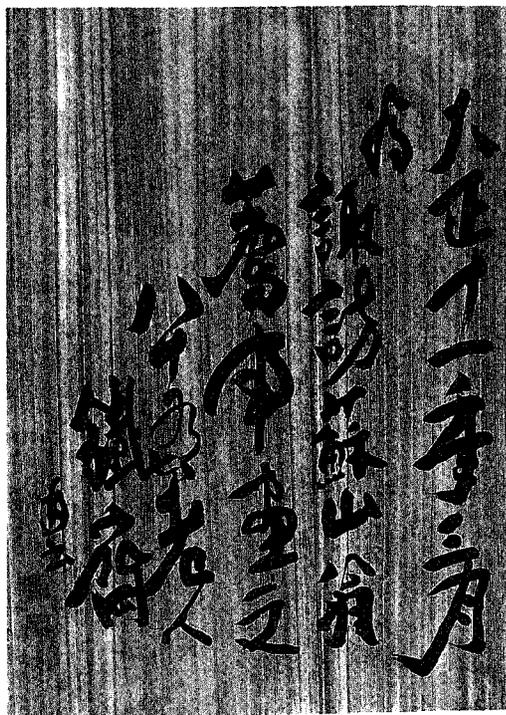
〔磁硯 箱書〕

〔図29〕

表 磁硯 蘓山造  
 裏 蘓山諏訪氏賀州人住于京  
 師。余同日拜帝室技藝員。  
 甚妙于造陶。此磁硯其女  
 蘇山諏訪氏ハ賀州ノ人ニシテ京師  
 ニ住ス。余ト同日ニ帝室技芸員ヲ  
 拜ス。甚夕造陶ニ妙ナリ。此ノ磁



26. 諏訪蘇山宛書翰



28. 同裏



27. 羅漢圖 箱書表



29. 磁硯 箱書表

爲翁之遺物。見惠。鐵硯、其ノ女、翁ノ遺物ト為セリ。  
蘇外史記。 惠マル。鐵齋外史記ス。

とあり、蘇山の養女虎子(二代蘇山)から鐵齋に翁の形見として磁硯が贈られたことが記されている。この磁硯の蓋には鐵齋が漆で「撥雲」の銘を書き、裏には「米寿鐵齋」と記している。

〔水郷清趣図〕 (図32)

香遠益清。

香ハ遠クシテ益清シ。

大正癸亥八月八日。

大正癸亥八月八日。

八十八又八叟 鐵齋外史。

八十八又八叟、鐵齋外史。

大きく蓮の花と飛鳥を描いて水郷の情景を表現し、『愛蓮説』の一句を引いて賛文としている。この作の箱書には

表 水郷清趣圖。

水郷清趣ノ図。

裏 大正十二年十一月、寫并

大正十二年十一月、写キ并セテ題

題。以贈大佛蘓山氏。

シ、以テ大仏ノ蘇山氏ニ贈ル。

八十八又八叟 鐵齋。

八十八又八叟、鐵齋。

とあり、初代蘇山はこの前年に歿しているところから、これは初代蘇山歿後、その女(二代蘇山)に贈られた作品であることがわかる。

〔樂茶碗 箱書〕 (図34)

表 大仏蘓山。樂茶碗。

大仏蘇山。樂茶碗。

裏 余拉菊齋訪蘇山家。貽此

余、菊齋ヲ拉レテ蘇山家ヲ訪ス。

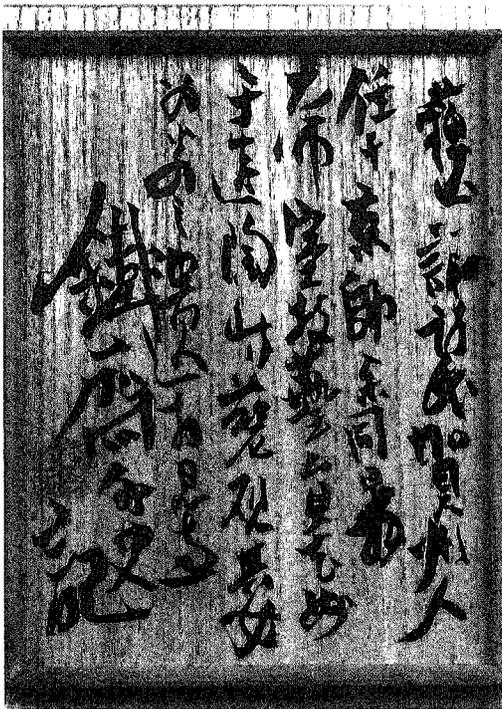
茶碗爲菊齋記其由。

此ノ茶碗ヲ貽リテ菊齋ノ為ニ其ノ

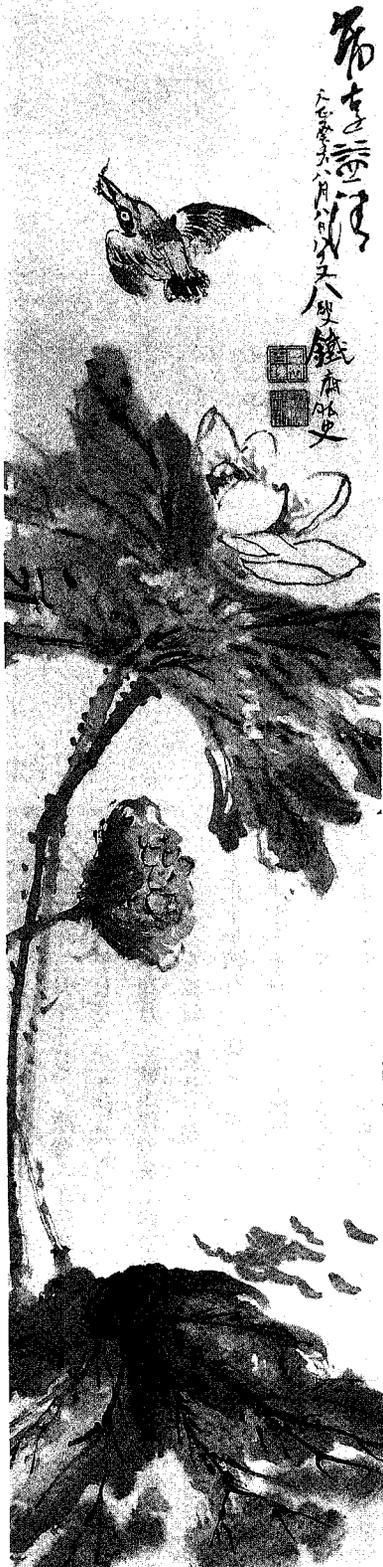
九十翁 鐵齋。

由ヲ記ス。九十翁、鐵齋。

この箱書には鐵齋が京都の指物師中島菊齋を引き連れて蘇山を訪ねた



30. 同裏



31. 磁硯

際に、蘇山が作った楽茶碗を鐵齋が菊齋に贈った旨が記されている。

さて、ここで前号から二号にわたって述べて来た鐵齋と蘇山の交友を物語る書翰や書画・篆刻・器玩作品を整理し、それぞれの事績を編年列挙してみたい。

大正六年六月十一日。富岡鐵齋（82歳）、諏訪蘇山（67歳）。

同時に帝室技芸員を拜命。

大正七年十二月二十三日。富岡謙蔵歿（46歳）。

大正九年五月。鐵齋「蝸牛廬図」を描き蘇山に贈る。

大正九年十二月四日。鐵齋、蘇山宛に「無事小神仙」磁印の礼状を

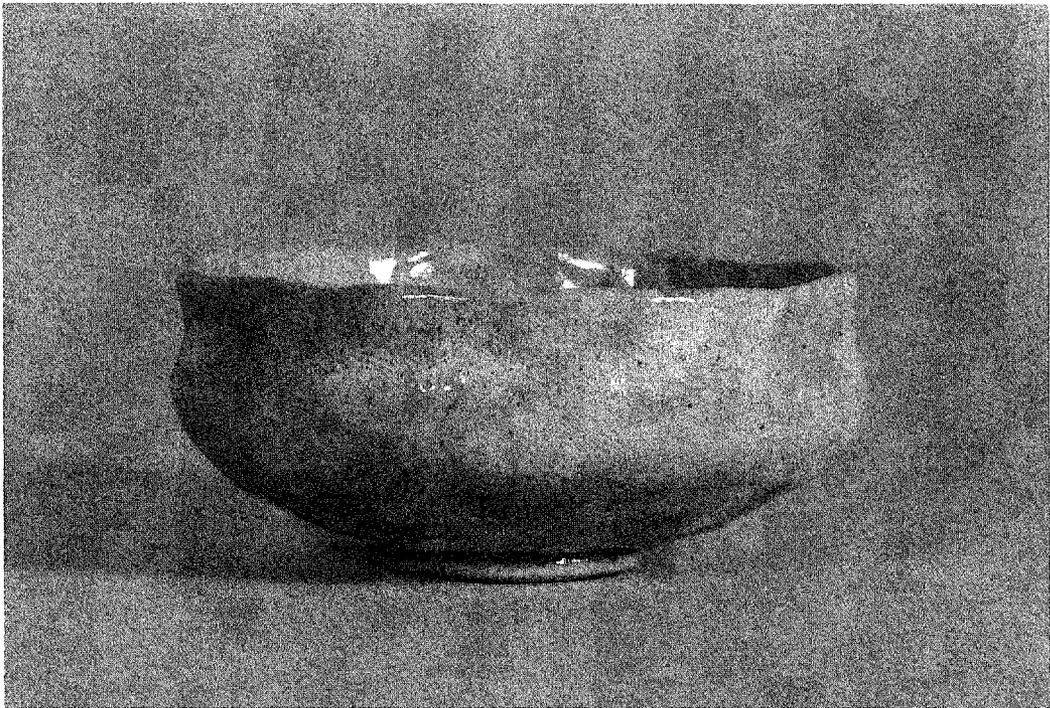
書く。（本誌第十七号、グラビア1.）

大正九年十二月二十四日。鐵齋「括囊無咎」磁印を刻す。

大正九年十二月二十五日。鐵齋「括囊無咎」磁印の焼成を蘇山に依

頼。（本誌第十七号、グラビア2.）

32. 水郷清趣図



33. 楽茶碗

大正十年一月。鐵齋「括囊無咎」扁額を蘇山に贈る。

大正十年二月十三日。鐵齋「布袋和尚図」を蘇山に贈る。(本誌第

十七号、グラビア3.)

大正十年小花月。蘇山作の菓子鉢に鐵齋が高遊外(売茶翁)の詩句を繪付、併せて箱書。

大正十年四月。鐵齋「布袋和尚図」の箱書。

大正十年七月一日。鐵齋「画碟」を贈られ書画を繪付。蘇山に謝意を示す。(本号グラビア1.)

大正十年七月十五日。「画碟」焼成、虎屋により鐵齋に届けらる。

大正十年七月十六日。鐵齋「画碟」の受贈に対し、蘇山に礼状を書く。(本誌グラビア2.)

大正十年七月。鐵齋「画碟」に箱書。

大正十年八月。鐵齋「帝者師太公望釣魚図」を蘇山に贈る。

大正十年八月。鐵齋「青磁筆洗」に箱書。

大正十年八月。鐵齋「絵碟」に魁星閣図を繪付。

大正十年九月。鐵齋「絵碟」に箱書。

大正十一年二月十四日。諏訪蘇山歿(72歳)。鐵齋、蘇山の葬儀で友人総代として弔辞を読む。

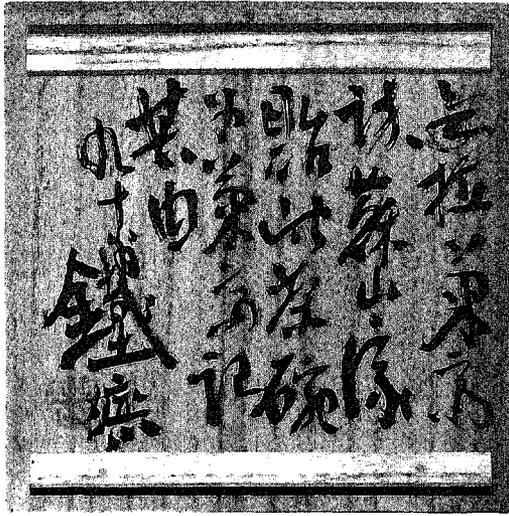
大正十一年三月。鐵齋、翌年の蘇山一周忌の為に「羅漢図」を描き、併せて箱書。

大正十一年四月。鐵齋「帝者師太公望釣魚図」に箱書。

大正十一年七月。鐵齋の書庫「魁星閣」落成。

大正十二年八月八日。鐵齋「水郷清趣図」を二代蘇山に贈る。

大正十二年。鐵齋、二代蘇山より磁硯を蘇山翁の形見として贈られ、「撥雲」の銘を漆書。



35. 同裏



34. 樂茶碗 箱書表

大正十二年。鐵齋「絵硯」に箱書追記。

大正十三年。鐵齋、中島菊齋を引き連れ蘇山家を訪い、菊齋に「楽茶碗」を贈る。

三十歳代よりひたすら中国文人の世界に憧れ、反骨精神を培い、画壇に交えず「不群の思潮」を買った鐵齋ではあったが、その生涯を詳細に検証すれば随所に学者や文人・工芸家・地方の名士・数寄者等との深い交情の跡が確認される。

大正六年、同時に帝室技芸員を拝命した鐵齋・蘇山両翁は、その後、蘇山が歿するまでの四年半というわずかな期間ではあったが、互の芸術と誠意を軸に実に豊かな交友を重ねている。

モノにこだわり生涯を古窯の研究と創意を柱に数々の名作を遺した蘇山、モノにこだわり和漢の典籍を博搜し、文人世界を堪能した鐵齋、二人の交情を物語る遺作や書翰を前に、大正期の芸苑の様子が髣髴し、しばし憧憬の念は尽きない。

(図版4-35は清荒神清澄寺写真提供)